

会 報

No.35 (1990年2月)

目 次

- ◆1989年度第2回評議員会議事録要旨…………… 1
- ◆第12回日本分子生物学会総会議事録要旨…………… 3
- ◆学会よりのお知らせ…………… 4
- ◆第13回(1990年)日本分子生物学会年会のお知らせ(その1) …… 6
- ◆第17回核酸化学シンポジウムについて…………… 8
- ◆ヒトゲノムプログラム推進グループより…………… 9
- ◆国際シンポジウムご案内……………11
- ◆日本学術会議より……………13

日 本 分 子 生 物 学 会

(THE MOLECULAR BIOLOGY SOCIETY OF JAPAN)

◆1989年度第2回評議員会議事録要旨

日 時：1989年11月28日午後4時—8時

場 所：仙台東急ホテル岩手の間

出席者：関口睦夫(会長)、饗場弘二、池田日出男、今本文男、大石道夫、
岡崎恒子、小川英行、小関治男、上代淑人、榊佳之、志村令郎、
鈴木義昭、中西重忠、堀内忠郎、本庶佑、三浦謹一郎、水野重樹、
村松正実、吉川寛、清水憲二(庶務)、西郷薫(会計)、高浪満(編集)

報告事項：

- (1) 関口会長より、11月10日現在の個人会員数は3596名(このうち正会員2632名、学生会員904名、外国在住会員58名)、賛助会員は28社(35口)であることが報告された。
- (2) 清水庶務幹事より、賞等選考結果、共催・後援集会、および学術会議登録更新等について報告があった。
- (3) 水野年会長より、第12回年会の運営について報告があった。
- (4) 高浪編集幹事より、「シリーズ分子生物学の進歩」(丸善)の出版状況について中間報告があった。

協議事項：

- (1) 西郷会計幹事より、1988年度会計収支決算および飯野徹雄、深沢俊夫両会計監査による監査結果について報告があり、了承された。
- (2) 同じく、1989年度会計収支中間報告があり、了承された。
- (3) 同じく、1990年度事業計画および予算案が提示され、了承されたので総会に計ることにした。
- (4) 将来計画委員会(三浦、大石、吉川委員)から活動状況が報告され、年会のあり方、シンポジウム開催試案について討議した。
- (5) 1990年度第13回年会について
第13回日本分子生物学会年会(関西地区)について、小川英行年会会長より、会期は11月26日(月)～11月29日(木)、会場は国立京都国際会館、特別講演の講師としてF.W.Stahl、J.Sulston両氏を招くこと、およびポスター示説とシンポジウムの2本立とすることなどの説明があり、了承された。
- (6) 1991年度第14回年会について
1991年度第14回日本分子生物学会年会担当を九州地区とし、年会会長を堀内忠郎九州大学教授に委嘱することを決定した。

(7) 科学研究費の問題について

- a. 平成元年9月6日付けで日本学術会議第4常置委員会より平成2年度科学研究費補助金の審査委員候補者の推薦の依頼があったが、当学会への候補者推薦依頼は今回が初めてのことで準備をしていないので、平成2年度については従来どおり日本生物物理学会から推薦してもらうことにした。平成3年度以降の推薦については、今回の連絡の趣旨をふまえて生物物理学会と協議することにした。協議は志村評議員に委任することになった。
- b. 将来的には分科として「分子生物学」を設けることの必要性が指摘された。この件については会長を中心として文部省、学術会議に働きかけているが、さらに運動を続けることにした。

(8) 学会誌について

分子生物学に関する Journal は数多く発刊されているが、日本の研究者が中心となった Journal を発刊することの意義が論議された。この件については具体的な問題も含めてワーキンググループをつくって検討することになった。ワーキンググループの構成は高浪編集幹事が関口会長と相談して決めることになった。

(9) その他

榊評議員より、学術情報センターから依頼された「学会発表データベース」作成への参加について説明があった。学会としては現時点では参加しないが、必要があれば今後検討することとした。

ヒトゲノムプロジェクトについて意見を交換した。

◆ 第12回日本分子生物学会総会議事録要旨

日 時：1989年11月30日午後 2 時— 2 時40分

場 所：宮城県民会館大ホール

(1) 関口会長挨拶の後、議長として黒岩厚、十川和博（東北大）が会長より推薦され、承認された。議長は委任状193通を含め、総会の成立を確認した。

(2) 経過報告

庶務報告：清水庶務幹事より、前回総会以降の本学会事業の経過、特に第6期評議員選挙に伴う新執行部の成立と活動について報告があった。

会長報告：関口会長より11月28日の評議員会での検討事項をもとに、年会やシンポジウムについての将来計画委員会の活動、ヒトゲノムプロジェクトや科研費の問題についての学会としての方針、学会誌についてのワーキンググループ発足、第13回および第14回年会などについての報告があった。

(3) 議事

- a. 西郷会計幹事より前年度（1988）収支決算報告があり、これを承認した。
- b. 同じく本年度（1989）収支中間報告があり、承認された。
- c. 同じく来年度（1990）事業計画および予算案について説明があり、承認された。承認された1990年度予算案は下記の通りである。

1990年度日本分子生物学会収支予算案(1990年4月1日～1991年3月31日)

収入の部

科 目	前年度予算額	予 算 案	摘 要
学 会 費	7,190,000	7,990,000	入会金 300,000 正会員 6,070,000 学生会員 1,620,000
賛 助 会 費	990,000	1,050,000	35口
広 告 収 入	0	1,800,000	会員名簿広告料
預 金 利 子	120,000	200,000	
雑 収 入	—	300,000	印税 他
小 計	8,300,000	11,340,000	
前 年 度 繰 越 金	6,600,000	9,000,000	(見込概算)
総 計	14,900,000	20,340,000	

支出の部

科 目	前年度予算額	予 算 案	摘 要
事業費	2,500,000	2,600,000	
┌ 会報発行	┌ 800,000	┌ 800,000	第13回年会 〃
└ プログラム	└ 500,000	└ 550,000	
┌ 特別講演謝金	┌ 200,000	┌ 200,000	
└ 第14回年会補助	└ 1,000,000	└ 1,000,000	
評議委員会費	450,000	2,200,000	
┌ 委員会費	┌ 450,000	┌ 600,000	〃
└ 役員選挙名簿作製費	└ 0	└ 1,600,000	
業務委託費	3,380,000	3,700,000	（財）日本学会事務センター
一般事務費	2,140,000	3,155,000	
┌ 用品費	┌ 5,000	┌ 5,000	会報の会員名簿同封に 伴う郵送料アップ
└ 印刷費	└ 35,000	└ 50,000	
┌ 通信費	┌ 2,000,000	┌ 3,000,000	
└ 事務謝費	└ 100,000	└ 50,000	
┌ 雑費	┌ 0	┌ 50,000	
予備費	6,430,000	500,000	
小計	14,900,000	12,155,000	
次年度繰越金	—————	8,185,000	
総計	14,900,000	20,340,000	

(4) その他

総会終了後、水野重樹年会会長の挨拶があり、続いて小川英行次回年会長より第13回年会の日程や準備状況について説明があった。

◆学会よりのお知らせ

1. 集会幹事

空席となっていた集会幹事に大島靖美氏（九州大学理学部）が会長より推薦され、全評議員の承認を得た。

2. 学会誌問題ワーキンググループ

評議員会で承認された標記ワーキンググループの構成が下記の5氏に決定した。

高浪 満(世話役)、吉川 寛、鈴木義昭、榊 佳之、石浜 明

3. ヒトゲノムプロジェクトについて

第12回年会に際し、本学会将来計画委員会は、このプロジェクトについての討論会を開催し、活発な意見が交された。その後の将来計画委員会の論議に基づき、三浦将来計画委員長のコメンツを紹介する。

ヒトゲノム研究計画についての集会（1989年12月1日、於仙台）

将来計画委員会

ヒトゲノムの研究計画が国際的にも国内的にも問題となり、これに関係の深い分子生物学会所属の研究者としてはこの国内外の情勢をよく知って今後に備えたいということで、仙台の年会のときに集会を催したが、関心を持つ人が多く、盛会であった。

国際的組織であるHUGOの副会長である松原謙一阪大教授からヒトゲノム研究計画について内外の情勢について詳しい説明があった。米国における研究事情にも詳しい大石道夫東大教授からコメントが述べられたあと、フロアーからも盛んに質疑や意見の開陳があった。

最も大きな問題点は、この研究が巨額な支出を伴うことによって分子生物学でも、この計画に含まれない分野に研究費のしわ寄せが来るのではないかという危惧であろう。この計画が費用の支出に関して国内外とも政治的なことと深くかかわっている点も気になる所であろう。そして事態は大変流動的である。

この研究計画を実際に進めて行こうとされる研究者がこの集会での意見ばかりでなく、これからも分子生物学者一般の意見を素直に受けとめて今後の進路で考慮して下さることを期待している。

4. 学会費納入についてのお願い

本年3月～4月にかけて、日本分子生物学会会費納入のお知らせが会員の皆様に届く予定になっております。つきましては、下記の3点についてよろしくお願い致します。

- 1) 例年年会演題募集時に納入が集中しますので、なるべくお早めに納入下さい。
- 2) 振替用紙の受領書は演題応募時に必要ですので大切に保管しておいて下さい。
- 3) 過年度会費未納の方には積算分の請求がありますので御留意下さい。

◆第13回（1990年）日本分子生物学会年会のお知らせ（その1）

—発表形式変更について—

第13回分子生物学会年会は、本年、11月26日(月)から11月29日(木)までの4日間京都市宝ヶ池の国立京都国際会館で開催されます。

ご承知のように本学会はますます隆盛となり、会員は3,500名を越え年会の講演数も1000題を越えております。特に年会には多方面の研究者が多数参加するようになって、様々な角度からの討論が可能になり、また関連分野について広い視野が開ける機会も増えました。しかし一方では、講演時間の短縮、会場数の増加、プログラム編成の困難さ等に伴って、かえって十分な討論が出来なくなった、聞ける演題数が減ってきたなどの不満が募ってきています。

そこで少しでも年会を有意義にしていくことを願い、第13回年会の準備委員会では年会の発表形式を変更することにしました。

変更点は、従来的一般講演の口頭発表を廃止して全てポスターセッションとし、その中から限られた数の演題を選んでシンポジウムとして編成するというものです。従って発表申込は全て、ポスターセッションとして受け付けます。同時に約20のテーマでシンポジウムが計画されますので、その申込演題と最も関連の深いシンポジウムを一つまたは二つ選びそれに応募していただきます。シンポジウムでの発表演題の選択は応募のあった演題の中から、予め決めておいたオーガナイザーが行ないます。シンポジウムでの講演者はポスターセッションと両方で発表することになります。

この方式の具体化については現在検討を重ねております。詳細については次の会報でお知らせしますが、およそ次のような計画をしております。

1. ポスター発表について

- 会場：イベントホール（3000m²）（本館と屋根付き専用通路で連絡）を使用。
毎日各 300~400 題ずつを、ほぼ1日展示する。
- 申込：発表希望者は予め決められた分野の一つを選び申込み。同時に発表希望シンポジウムを一つまたは二つ選びその演題を申し込むことができる。
- 申込締め切り：7月上旬に繰り上げる。但し、シンポジウムに発表を申込まない（ポスターのみの）ときには、8月下旬とする。
- 発表：指定された日に展示。午前中に口頭説明。ひきつづき夜 6~7 時迄（最終日は4時半頃迄）展示。展示スペースは、1題約 150cm×150cm。

2. シンポジウムについて

会場：5~6会場。毎日午後開催。但し第3日目（総会・特別講演・懇親会を予定）は除く。

オ-ガナイザ-：1分野について1~2名、準備委員会が依頼する。若手の登用を積極的に行なう。担当分野に応募のあった演題から選んでプログラムを編成するが、時間の制約から演題数は総数で150~200題の見込み。

尚、シンポジウムのプログラム編成と運営は、オ-ガナイザ-と座長の裁量で弾力的に行なえるようにする。

発表：発表者は原則としてポスター申し込み演題の筆頭著者とする。

この方式で、年會が少しでもより実質的な討論の場となることを切望しています。

以上、突然の変更でご迷惑をおかけするかもしれませんが、われわれの意図するところを汲み取って戴きご協力のほどお願い致します。

第13回分子生物学会年會

準備委員会委員長

小川 英行

(大阪大学理学部)

◆第17回核酸化学シンポジウムについて

第17回 核酸化学シンポジウム

共 催：日本分子生物学会 ほか

日 時：11月8日(木)～10日(土)

会 場：名古屋市中小企業振興会館(吹上ホール)(名古屋市千種区吹上二丁目6番3号：電話(052)735-2111)

〔交通〕①名古屋駅前市バスターミナル(松坂屋ナゴヤエキ店2階)グリーンフォーム2番のりばより市バス81系統田代本通ゆき乗車、吹上または吹上振興会館下車(所用時間約25分)。②栄バスターミナル21番のりばより市バス160系統名古屋大学前ゆき乗車、吹上または吹上振興会館下車(所用時間約10分)。なお、名古屋駅前には市バスターミナルのほか名鉄バスターミナル(名鉄メルサ3、4階)がありますが、ここでは市バスを利用できませんのでお間違えのないようご注意ください。

主 題：核酸および関連化合物の有機化学、物理化学、分析化学、生化学および分子生物学。

〔発表時間〕1演題につき15分。なお演題数が多く、3日間で消化できない場合には、研究概要口頭説明4～5分を含むポスターセッションを設けます。口頭またはポスター発表の決定は組織委員会に一任願います。

講演申込締切：4月30日(月)

B5版大の用紙に、①演題、②発表者の所属・氏名(講演者に○印)、③連絡先(郵便番号および電話番号も記載すること)、④和文要旨(約200字)、を記載し、申し込み受領通知用の葉書(返信宛先および演題名を記入のこと)を添えて下記までお申し込み下さい。

講演要旨英文原稿締切：6月30日(土)

申し込み者には、後日、講演要旨作成要項および原稿用紙を送付致しますので、同要項に従って英文要旨を作成の上、期日までにご返送下さい。要旨はNucleic Acids Symposium Series(1990)として、IRL Press社より発行されます。

参加予約申込締切：8月31日(金)

①氏名、②所属、③連絡先、を明記の上、銀行振込(三井銀行本山支店普通預金5384298 第17回核酸化学シンポジウム)にて下記参加登録費を送金下さい。なお、参加登録証は当日会場にてお渡し致します。

参加登録費 予約：一般(共催学会会員)8,000円、学生5,000円。当日：各1,000円増し。

エキスカーションおよび懇親会：

11月9日(金)午後から犬山方面へのバスエキスカーションを行い、引き続き18時より、現地名鉄犬山ホテル和風別館白帝閣(犬山市犬山北古券107-1、電話(0568)61-2211)にて懇親会を行います(帰名予定午後10時)。参加費：一般10,000円、学生8,000円。エキスカーションまたは懇親会へのみの参加はできません。バスの都合がありますので原則として予約制とします。参加費を添え、参加登録予約時に申し込み下さい。なお余裕がある場合には前日、申込受付を行うこともあります。

申 込 先：3月31日まで：464-01名古屋市千種区不老町 名古屋大学化学測定機器センター(電話(052)781-5111、内線6585；FAX(052)781-9404)、4月1日から：名古屋大学教養部化学教室(FAX(052)782-8261) 早川芳宏。

〔宿泊案内〕いくつかのホテルを割り引き料金で用意しております。希望者は東急観光名古屋団体旅行支店核酸化学シンポジウム係(電話(052)201-0109；FAX(052)201-6199、担当中村忠人、中島靖文)あて、お申し込み下さい。

◆ヒトゲノム・プログラム推進グループより

ヒトゲノムの解析を学際協力研究で

—日本におけるヒトゲノム解析プログラムの進め方について—

1970年代に遺伝子のクローニングとDNAの塩基配列決定技術が開発され普及してから、生物学は大きく変わりました。多細胞生物の研究、なかでもヒトの研究が急速に進み、これまでに解析された数百の遺伝子の情報からだけでも、ヒトの生物学的理解は格段に深まりました。今後、発生・分化や脳神経など高次の生命現象の研究、さらには、生態系での生物相互の関係などの研究が進むことが期待されますが、遺伝子の解析はそれらの研究を支えるものとしても、ますます必要になるでしょう。

そのような研究の流れの中で、生物のゲノムDNAの全構造を解析し、そこに含まれている遺伝情報のすべてを解読しようという計画が動き始めました。なかでもヒトゲノムを解析する計画が各国で軌道に乗り始めています。研究の国際的な協調・調整をはかる機関 HUGO (Human Genome Organization) も設立されました。これらの計画の進展は、生物科学の研究を発展させるだけでなく、生物系がもつ大量の情報の処理や、その解析を中心として情報科学の新しい分野を産み出す可能性があります。また、得られる知見は、人間を始めとする生物の科学的理解や、それに基づく思想に、さらには、その医学や産業への応用に、画期的なインパクトを与えると期待されています。

しかし、大きなゲノム（ヒトの場合、約30億塩基対のDNA、5～20万の遺伝子）を解析し、包括的理解を目指すには、現在のDNA研究技術を基盤に、ただ労力をかけるだけでは目的は達せられません。新しい思考法や方法論の飛躍的な展開、さらに、大量情報の処理、解析システムの開発などが不可欠です。課題の多くは、生物学の中だけでは収まらず、新たな学際研究の誕生によって初めて解決が可能なものです。

この研究には、国際協力も欠かせません。ヒトゲノム解析の国際的機運の高まりに呼応して、わが国でも検討が進められ、最近「大学等におけるヒトゲノム・プログラムの推進について」の建議が、学術審議会からなされました(注)。これを受けて文部省は平成元年度より2年間、総合研究(A)「ヒトゲノム・プログラムの推進に関する研究」(代表者・大阪大学細胞工学センター・松原謙一)を発足させました。この研究班には、平成3年度に予想される本格的研究の開始にそなえた準備が要請されました。

準備的研究の2年間について私たちは、ゲノムの構造と機能の解明に焦点を当てた遺伝情報の全体像を理解することを最終目的として、ヒトを含む多くの生物種についてのゲノムの分子生物学的研究を総合的に推進する体制の確立のために努力したいと考えています。この基本構想のもとに、ヒトゲノムについてはその医学的意義の重要性と国際協力の要請を考慮して、遺伝子の同定、マッピング、構造決定、及び各種の機能領域の解析を中心とした研究を重点的に推進し、一方では、巨大ゲノムの解析のため必要となる新しい方法論と技術の開発についても組織的に取り組む必要があると考えています。

こうした考え方に立って、当面下記のように準備的研究を進めて行く予定です。

I. 当面の研究課題

- 1) ヒト・ゲノムの解析。ヒトゲノムの遺伝学および物理的地図の作成、そこに分布する遺伝子や各種機能単位の同定、個別遺伝子の塩基配列決定、さらにゲノム解析の優れた原理や方法論の開発などを手がける。また、国際的な分業と協力に向けて、わが国の対応の方向を検討する。
- 2) cDNA ライブラリーの作製。ヒト・ゲノム DNA のなかで蛋白質にコードされる領域の構造を解明することは極めて重要である。ヒトゲノム・プログラムの推進に対応できるよう、組織・器官の cDNA ライブラリーを作製し、その整理・解析を目標とした研究を行う。
- 3) DNA 解析技術の開発。現在の DNA 解析技術だけでは、巨大ゲノムの全構造に迫ることは難しい。染色体や巨大 DNA の分離、DNA の任意位置切断、長鎖 DNA のクローニング、クローンの安定保持、長距離シーケンシングなどの課題について、改良と開発に関わる研究を行う。
- 4) 大量情報処理系の開発。各種生物の染色体の遺伝子地図づくりや DNA 塩基配列データベースの構築などが国際協力体制の下に進められているが、巨大ゲノムの DNA 水準での解析が軌道にのると、現在よりもはるかに大量の情報処理が必要となる。それに応じられるシステムの開発、遺伝子地図・物理地図・塩基配列の一本化の試み、生物種間を連携させたデータベースの構築、新情報の解読などを旨とした研究を行う。
- 5) 各種生物ゲノムの解析。ヒト・ゲノムの解析は各種生物のゲノム解析と平行して進むことが重要である。新しい技術やゲノムの構造・機能の知見などを交流しつつ同調して研究が進行するように図る。

II. 将来計画の策定

将来計画の策定、特に2年後に発足が期待されている本格的ゲノム研究に向けての研究計画と研究組織の確立が要望されている。そこで必要な意見を広く取りまとめ、討論の資料として提出する。また、これに必要な研究環境を整備し、国際協力の要請に対応できる国内の体制をつくることに協力する。

本研究が着実に進展し、わが国の基礎研究の発展のために有益な役割を果たすためには、生物ゲノムの研究者はもちろん、広く生物学、遺伝学、医学、農学、物理学、化学、工学、情報科学などの領域の研究者の協力が必要となります。そのために、巨大ゲノム解析のための研究への直接参加はもとより、基盤研究にも参加し、協力下さることを期待いたします。

なお、この総合研究班は、上記の研究を当面2年の目標で進め、2年後に発足が期待されているヒトゲノムを中心とした本格的研究にバトンタッチするのを任務としています。そのためには、本格的研究の進め方についても、さまざまな意見、提案をお寄せ下さるようお願いいたします。

1989年10月

ヒトゲノム・プログラム推進グループ

松原謙一（代表・大阪大学細胞工学センター）	清水信義（慶応義塾大学医学部）
石浜 明（国立遺伝学研究所分子遺伝研究系）	高浪 満（京都大学化学研究所）
榎 佳之（九州大学遺伝情報実験施設）	吉田光昭（東京大学医科学研究所）

(注) このほかに、学術会議・生命科学と生命工学特別委員会報告「ヒトゲノム・プロジェクトの推進について」、科学技術庁・航空電子等審議会答申「ヒト遺伝子解析に関する総合的な研究開発の推進方策について」がありそれぞれ研究の早急な推進を提案し、且つそのさい考慮すべき問題点などを論じています。

◆国際シンポジウムご案内

1. 国際シンポジウム「生命の進化」

開催要綱

1. 名称：国際シンポジウム「生命の進化」
2. 会期：1990年3月25日（日）Mixer・Registration
3月26日（月）Symposium
3月27日（火） 〃
3月28日（水） 〃
3月29日（木）Public Lecture
3. 会場：国立京都国際会館・Room D (Public Lecture 会場は、Room A)
〒606 京都市左京区宝ヶ池
Tel (075) 791-3111
4. 主催：財団法人国際高等研究所
〒604 京都市中京区烏丸通夷川上ル・京都商工会議所ビル5F
Tel (075) 255-6577
5. 後援：文部省
財団法人国際花と緑の博覧会協会
サントリー株式会社
6. 使用言語：英語
7. 組織委員会：
委員長：大澤 省三 教授 名古屋大学 理学部 生物学科
副委員長：本庶 佑 教授 京都大学 医学部 医化学教室
尾本 恵市 教授 東京大学 理学部 人類学教室
熊沢 峰夫 教授 東京大学 理学部 地球物理学教室
浜田 隆士 教授 東京大学 教養学部 基礎科学科 第2
宮田 隆 助教授 九州大学 理学部 生物学教室
Alan M. Weiner Department of Molecular Biophysics and Biochemistry, Yale University
School of Medicine
Sydney Brenner Medical Research Council, Laboratory of Molecular Biology
8. 招待研究者：国 外 15名程度
国 内 16名程度
9. 参加人数：100～150名を予定

■公開講演会 (Public Lecture) (入場無料)

Alan M. WEINER	'Thinking about the or origin of life: from philosophy to respectability'
Motoo KIMURA	'分子進化中立説の最近の発展'
Allan WILSON	'Molecular Biology and Human Evolution'

□問い合わせ先：財団法人 国際高等研究所国際シンポジウム「生命の進化」事務局
京都市中京区烏丸通り夷川上る・Tel (075) 255-6577・FAX (075) 252-1602

2. 第4回アジア・オセアニア国際老年学会議開催の御案内

第4回アジア・オセアニア国際老年学会議を下記の通り開催致します。

開催時期：1991年10月31、11月1日～3日（木、金、土、日）

開催場所：横浜市、パシフィコ横浜・会議センター

ファーストサーキュラーの請求先：〒113

東京都文京区湯島4-2-1 杏林ビル702

第4回アジア・オセアニア国際老年学会議事務局 宛

Tel 03-814-8104

「ヒト・ゲノム・プロジェクトの 推進について(勧告)」を採択

日本学術会議は、去る10月18日から20日まで第108回総会(第14期4回目の総会)を開催しました。今回の日本学術会議だよりでは、その総会で採択された勧告を中心に、同総会の議事内容等について、お知らせいたします。

日本学術会議第108回総会報告

第108回総会の主な議事概要は次のとおりであった。

第1日(10月18日)の午前。まず、会長から、前回総会以後の経過報告が行われ、続いて、各部・委員会の報告が行われた。さらに、今回総会に提案されている3案件についてそれぞれ提案説明がなされた後、質疑応答が行われた。

第1日の午後。各部会が開催され、午前中に提案説明された総会提案案件等の審議が行われた。

第2日(10月19日)の午前。前日提案された案件の審議・採決が順次行われた。

まず、第7部の専門別の会員定数の変更並びに同部世話担当の研究連絡委員会の再編成(統合3件、分割2件、新設1件、名称変更6件)を内容とする、会則の一部改正が採択された。

続いて、第4部及び第7部の「会員の推薦に係る研究連絡委員会」の指定の変更を内容とする、関係規則の一部改正が採択された。

これらの改正は、具体的には第15期からの組織・活動に係るものである。

さらに、生命科学と生命工学特別委員会の提案による「ヒト・ゲノム・プロジェクトの推進について(勧告)」が採択された。なお、この件の審議の際には、研究成果公開の原則とプライバシー保護等の問題、「プロジェクト・チェック機構(仮称)」の果たす具体的役割等について、討議が行われた。この勧告は、同日午後直ちに内閣総理大臣に提出され、関係省庁に送付された(この勧告の詳細は、別掲参照)。

また、本総会においては、会長から、日本学術会議の移転問題に関し、前回総会以降の主な動きとして、①去る8月「国の行政機関等移転推進連絡会議」において、本会議の移転先が横浜市「みなとみらい21地区」となったこと、②これに対し三役及び運営審議会のとった対応、などについて報告があった。種々質疑応答が行われた後、これまでの三役及び運営審議会の対応については、基本的な了承がなされた。また、今後の移転に関する諸問題については、当面、三役及び運営審議会にその処理を一任することで了承された。

第2日の午後。「地球環境問題」について、活発な自由討議が行われた(この自由討議の詳細は、別掲参照)。

第3日(10月20日)午前には各常置委員会が、**午後**には各特別委員会が、それぞれ開催されさ。

ヒト・ゲノム・プロジェクト の推進について(勧告)

(勧告本文)

ヒト・ゲノムの全DNA塩基配列決定を主たる目標とするヒト・ゲノム・プロジェクトは、関連諸分野の学術研究に極めて大きなインパクトを与えると期待され、我が国として早急かつ重点的に推進すべきである。

そのためには、ヒト・ゲノム・プロジェクト推進組織(仮称)を設け、基本計画の立案、実施計画の策定、省庁間などの協議、国際協力、データ・ベースとレポジトリの整備などを総合的に行うべきである。

また、この推進組織との緊密な連携のもとに、研究計画の実施に伴う社会的、法律的及び倫理的諸問題を客観的かつ公正に判断するとともに、これらの諸問題に適正に対処することを目的とするプロジェクト・チェック機構(仮称)を設立し全体として調和のとれた施策を進める必要がある。よって、日本学術会議は我が国における本プロジェクトの推進を図りそのために必要な措置を講ずるよう勧告する。

(説明)[要旨]

- 1 ヒト・ゲノム・プロジェクトは、人類の遺伝情報の解読と遺伝子機能の解明を目指した研究計画であり、早急かつ重点的に推進すべきである。このプロジェクトによって生命科学等の領域の技術開発が進めば、人類福祉に貢献することは疑いない。
- 2 ヒト・ゲノム・プロジェクトを推進するために、ヒト・ゲノム・プロジェクト推進組織(仮称)を設置する。その主たる目的は勧告本文のとおりである。この組織は、研究の進展に弾力的に対処できるものとし、具体的問題の処理のため委員会等を設ける。運営に当たっては個々の研究者とその集団の自主性を最大限に尊重すべきである。
- 3 このプロジェクトの実施に伴って生じる社会的、法律的及び倫理的諸問題に適切に対処するために、プロジェクト・チェック機構(仮称)を設立する。その主たる目的は、検体提供者の保護のための基準を作成すること、情報の管理、研究計画と成果の一般への公開の基準を作成すること、知的所有権問題についての方針を作成すること、研究成果の応用段階における倫理的問題についての指針を作成することであり、目的達成のための必要な権限が与えられるべきである。